

月刊

いじろのとも

第十三卷

九月号

お互いに助け合おう

先進国よ

おごることなかれ

経済面で援助しよう

後進国よ

卑屈になることなかれ

先進国の失ったものを

与えていこう

森を育てる

森の中

なぜか安らぐ

日本人

森で生きてた

過去を棄てるな

人生を考え直して

みたい人は(一〇四)

空海『即身成仏義』解説(七)

〔(四) 1 六大総説〕 続き

かの種子(しゅじ) 真言に曰く、

(アピラウンケン・梵字)

いはく、阿字諸法本不生(あじしよほうほんぷし
よう)の義とは、即ち是れ、地大なり。 字離言説
(ばじりごんせつ)とは、これを水大という。 清淨
無垢塵(しよじよじよむくじん)とは、是れ則ち、
字(らじ) 火大なり。 因業不可得(いんごうふか
とく)とは、訶字門(かじもん) 風大なり。 等虚空
(とうこくう)とは、欠字(けんじ)の字相、即ち
空大なり。 我覚(がかく)とは、識大なり。

* (ば)は口偏(くちへん)に「縛」、(ら)は同じく

口偏に「羅」

参考までに、現代語訳を頼富本宏著『日本の仏典2
空海』(筑摩書房刊)の「即身成仏義」から、引用させ
て頂きます。

* * * *

密教の中心である大日如来を梵字の音節によって象徴
した真言では、

(アピラウンケン・梵字)

という。

説明を加えると、

1 (ア・^あ)字は、さとりの世界にあるあらゆる存
在は、本来生起(も滅亡)もないことを象徴しており、
(そのことが、大地の堅固さにたとえられるので)
(ア)字は地大を表している。

2 (バ・^ば)字は、さとりの世界は、通常の言語で
は表現されないことを象徴しており、(そのことが、水
の持つ清めの力にたとえられるので) (バ)字は水大
を表している。

3 (ラ・^ら)字は、さとりの世界が汚れないこと
を象徴しており、(そのことが、すべてを焼き尽くす火
の浄化力にたとえられるので) (ラ)字は火大を表し
ている。

4 (キャ・^{きゃ})字は、さとりの世界が原因や条件な
どの働きを超越していることを象徴しており、(そのこ
とがすべてを吹き払う風の力にたとえられるので) (キ
ヤ)字は風大を表している。

5 (ケン・^{けん}・kham)字は、さとりの世界が虚空に等

しいことを象徴し、(そのことが、あらゆるものを包含する虚空にたとえられるので) 字は空大を表している。6 私はさとした「我覚」というのは(精神の働きであるから)、識大を表している。

* * * * *

先月号で説明を省略しました六大が、ここで述べられています。先月号には、本文には無かったサンスクリット語とその漢字が、現代語訳に添えられていました。見通しをよくするために、現代語訳を引用させて頂いた本から、それらの対応の一覧表をコピーさせて頂きますと次のようになります。

『大日経』「具縁品」(括弧内は空海の釈)

- | | | |
|-----------|-----|----|
| (一) 覚本不生 | ア字 | 地大 |
| (二) 出過語言道 | バ字 | 水大 |
| (三) 諸過解脱 | ラ字 | 火大 |
| (四) 遠離因縁 | キャ字 | 風大 |
| (五) 等虚空 | ケン字 | 空大 |
| (六) (我覚) | ウン字 | 識大 |

なお、サンスクリット語の読みは、順に「ア・バ・ラ・カ・キャ・ウン」です。また、一覧表の但書にありませんように、6の我覚は、大日経にはない空海の創意・解釈で、先月号の本文で言いますと、「我れ、・覚り、・

・出過し、・得、・遠離せり、・知る」の、それぞれの、人間としての主体性のようなものを言っていると考えられます。

ここで述べられていますのは、先月号と基本的に同じことです。先月号を復習して頂ければと思います。

ここで大切なことは、「六大」について述べられていることは、現代語訳にもはっきり訳されていますように、「さとりの世界(境地)」のことである、ということですから、読まれても、「そうかなあ」と信じて頂く以外に、これが真実かどうか、自分で判断することはできません。通常の意識的な判断を超えたことなのです。

ここでは、新たに、なぜ「さとり」の境地」が地水火風の五大にたとえられるのかが、述べられています。このたとえば、私たちに最も身近な「大自然」を構成する要素に例えることで、できるだけ具体的なイメージを持つてるようにしたものです。そうしたものが、自分と一体なのです。でも、それが理解できない現代では、土地も水も火(エネルギー源)も風も空気も、すべてが汚染されています。どう汚染されているかは、ご自分で考えて頂くとして、それらが、自分自身と一体だという認識がなければ、こうした汚染を止めることは難しいと思います。汚染の究極は地球自身の滅亡なのですが。

自作詩短歌等選

自分を越えた力

環境を護ってやる
という意識では
環境は
ますます悪化する
環境に
支えられて
生かされている
という意識がある
でも
こうした発想は
自己追求制度の
民主主義では
不可能だ

そのためには
自分を越えた力への
畏敬の念がある
信仰がある

知事選の争点転換

田中知事
ダムではなくて
争点を
知事の資質に
移して勝利

日本と距離をおくタイ

日本と深い関係にあった
タイは
最近
日本とは距離をおき
米国との絆を
深めつつあるという

密航者も逃げる日本

日本に
見切りをつけて
中国に帰国する
密航者が増えている
という

密航者からも
見放される日本

政治不信の極致

俺は
政治家になるほど
落ちぶれてはいないぜ

持続可能な開発に驚く

いま

南アフリカの

ヨハネスブルクで

環境・開発サミットが

開かれている

その正式な名称は

持続可能な

開発に関する

世界首脳会議

という

持続可能な

開発なぞ

あるはずがないし

また

環境を保護する

と考えること自体が

転倒した考え方だぞ

民族エゴの主張

民族の

自立独立

強調し

よそとの協調

たいていが無視

外国企業の日本撤退

外国企業の

日本撤退が

目立っている

という

これも

日本衰退の

兆候の一つ

地球サミット失敗

日本の主なNGOは

92年の地球サミットは

もはや失敗であった

と共同声明を

出したらしい

なぜ排他的になる

いま

世界中が

排他的に

なりつつある

それは

自己追求原理の

民主主義と

資本主義の

必然的帰結

なぜ解決しないのか

それは

解決をもたらず

哲学が不在だからだ

自作随筆選

市場経済と戦後日本

前にも書いたと思うのですが、このところ、経済の問題に関心をもっていて、新聞でも経済問題へのコメントには、大体、目を通すようにしています。

八月二十日、二十一日と、(上)(下)二回に渡り、読売新聞の文化欄に「市場経済と戦後日本 猪木武徳VS坂本多加雄」と題して、両者が対談した記事が載りました。子細に読みましたが、その内容の「ひどい」に驚き、書かすにはおれない気持ちになりました。「ひどい」とは、失礼な言い方かもしれませんが、戦後から今日にかけて、日本社会が陥ってきた問題状況の認識が、私から見ますと、極めて不十分ですし、また、その問題状況をどう脱出すべきかの対応策も、問題認識が不十分ですので当然なのですが、とても対応策と言えるようなものではないのです。そういう意味で、「ひどい」と言わせて頂いたわけで、いつものように、別に両者に「恨(うら)み」や「妬(ねた)み」があるわけではありません。

「余談ですが、日本人は他者の主張にコメントします

と、「けち」をつけられたと思うのか、とても感情的になります。(対談されたこの両者は、そんなことはないと思います)。また逆も言えます。私が学術雑誌に投稿した論文へのコメントも同様でして、自分の感情で嫌だと思ふのか(こいつは、業績をあげすぎていやがる。腹が立つなあ。けちをつけてやれ。無意識のうちにもそう思ふのか)、「合理的・理性的」とはとても言えないものが、圧倒的に多いのです。感情的なコメントは、欧米人では考えられないことだと思えます。こんなところに、日本人に独創的な研究が出ない遠因があるのではないのでしょうか。日本人同士ですと、他者の業績や研究成果に謙虚に向かい合い、理性的に対応できないのですが、他己のなさや劣等感からか、欧米人のものは有りがたがるのようです。閑話休題。」

ところで、この対談をされた両氏ですが、坂本氏は日本政治思想史がご専門で、学習院大学教授ですし、また、猪木氏は労働経済学、経済思想がご専門で、国際日本文化研究センター教授です。新聞の紹介によりますと、両者には、共に、多くの著書があるようです。

前置きが長くなりましたが、本題に入ります。

戦後、日本が欧米と同様に、市場経済、つまり「自由競争原理」を中心にして経済を運営してきた点では、両者

の意見が一致していません。私も、それは同感です。

ところが、六〇年代末から七〇年代にかけて、社会に変化が起こりだし、市場経済や民主制がおかしくなってきた。学園紛争、あさま山荘事件、よど号ハイジャック事件と、予想もできないことが、若者によって、次々と引き起こされてきた。そして、八〇年代に至って、「将来のために頑張る」というのではなく、「現在を楽しめばいい」という傾向が現れてきた、と両者は指摘します。この見方にも、私は同感です。

では、なぜ、こうなつて来たのか。

前述のように、事実の認識にはずれるはないのですが、こうした事実を招来した原因についての、両者の議論には、私は、全く賛成しかねるのです。

以下では、両者が述べておられる、この、現状を招来した原因や、現状を打開する対策について、それが極めて不的確であることを指摘させて頂きます。

まず、坂本氏は、二十日に載った（上）の最後のあたりで、次のように述べています。

〔坂本〕言論界を考えれば、かつては社会主義なし民主社会主義を肯定する議論が強かった。それが何の反省も総括もなしに「今や社会主義の時代じゃ

ない。市場経済の時代だ」という風潮になってしまった。いわば思想的な裏付けを欠く点が、日本の民主制、市場制の弱点になっているのではないか。

〔猪木〕（省略）

〔坂本〕自らを語るパラダイムに問題がひそんでいるからこそ、日本人のある種の劣等感を助長するよきな議論が出てきたり、まったく逆に「日本の方がいいんだ」という話になったりする。よく考えなければいけないことだと思います。

坂本氏によれば、「思想的な裏付けを欠く」、つまり「自らを語るパラダイムがない」から、いろいろ問題が起こりだしたのだ、というわけです。だから、「よく考えなければいけない」と言われるのですが、二十一日の（下）にそれが展開されているかといいますと、とても「新たな思想」といえるほどのものはないように思えるのです。

たとえば両者は、冒頭で次のように話されます。少し長くなりますが引用させて頂きます。

〔坂本〕市場経済では、公共性がなごりにされる危険性があります。殊に八〇年代以降、「市場経済

は私的利益の総和にすぎない。そこに公共性などない」といったラディカルな思想がはびこりました。

こういう思想が台頭するにつれ、個人を超えた公共性という考え方が浸食されていったのではないでしょう。そもそも公共性とは「将来どうするか」と長期的な展望に立った時に初めて現れてくるもので、「現在を楽しめればいい」という時代には乏しくならざるをえません。

〔猪木〕しかし、一方ではバブル処理の問題にしても、環境問題にしても、日本の場合は反省が中途半端になり、自由な活動を阻害してしまうことも起りました。我々は道徳的に物事を解釈するのが好きですからね。環境問題で言えば、もともと何が「自然」かというのは非常に難しい問題なのに、「こうあるべき」という観念から、とにかく「自然破壊はすべて悪だ」となってしまう。

〔坂本〕道徳といっても世界が狭いんですね。よく言う「プチ正義」みたいなものです。

〔猪木〕そうですね。貞操さとか、金銭的な潔白さは、「私」の道徳ですよ。そうした私的関心が強くなって公的なものへの無関心がはびこる時に、専制が忍びこんでくるのだと、トクヴィルが言ってい

ます。それが新しい宗教なのか政党なのかわかりませんが、専制を未然に防ぐ意味でも、公共性を常に意識することが大切です。

〔坂本〕公共を語るための言語を鍛えなくてはなりません。特に政治の世界でね。経済は資力さえあれば、私的な欲望をそのまま表現しても成り立つ社会ですが、政治は違います。動機は私的利益に発していても、実現までには様々な公共的言語による正当化を必要とするんです。

〔猪木〕公共化するとは人を巻き込み、説得し、賛意を得て、議会なら議会という場で政治的な力を発揮させることですからね。

〔坂本〕政治はまさにそういう世界です。民主主義は公共の論理の争いなんです。(以下略)。

引用が長くなりましたが、前述の、事実を招来した原因についての、この方たちの主張を正確に伝えるために、仕方なくこうなっていました。

さて、この引用は、公共性をめぐって議論が展開されています。この公共性が日本人に欠けていることは、私もその通りだと思うのですが、でも、私が公共性だと考えることで、この方たちがそう思っていないことが、こ

の引用の中にあります。それを指摘することが、原因についての不的確さを明らかにする道と考えます。

それは、「貞節さ」と「金銭的な潔白さ」についての主張です。私の理論で言いますと、公共性は「他己」に属することです。この二つの道徳的な徳目も、実は、共に他己に属するのです。公共性は、人々の行動を規制する「規範」をなすものの一つなのです。トクヴィルという有名なフランスの歴史家・政治家がいったとおっしゃる『貞操さとか、金銭的な潔白さは、「私」の道德ですよ。そうした私的関心が強くなって公的なものへの無関心がはびこる時に、専制が忍びこんでくる』ということですが、これはまったくの間違いです。

まず、「貞操さとか、金銭的な潔白さ」は私的な関心ではありません。これは、公的で社会的な行動規範です。現在、日本では、この二つの大切な行動規範は、まったくといっていいほど失われています。その典型例が、少女たちの援助交際です。お金が欲しく、そのために貞操を犠牲にしても平気です。貞操を犠牲にした（破った）という自覚すらありません。

アメリカでは、こんなことは、全く考えられません。いつも言っていますように、残念ながら、日本は先進国の中ではトップランナーとなって、公的な社会規範を喪

失させ、社会を崩壊させているのです。援助交際は、誰にも迷惑をかけないから、私的なものだという方があるかも知れませんが、それは、人々のところを荒れさせ、社会を崩壊に導くという、大きな迷惑を多数の人にかけていることに、気付かないだけです。

トクヴィルの「専制が忍び込む」原因となる「私的関心が強くなる」と言いますのは、自己が肥大してあらゆる行動原理が自分の「損得」と「選り好み（＝選好）」になってしまふことに当たっています。いまの日本はそうなっています。ですから、ある意味で専制が忍び込む危険が高まっているのです。その危険の一つの現れが、最近のことで言いますと、オウム真理教に代表されますような新宗教の勃興です。それらは一様に、ここでいう「私的」な自己の肥大に訴えかけています。自分の「損得」と「選好」という行動基準を刺激しているのです。

坂本氏の発言の中には、政治すらが、「動機は私的利益に発していても、実現までには様々な公共的言語による正当化を必要とする」とありますが、いま日本では、企業家は言うに及ばず、政治家も、官吏も、その他あらゆる職業の人が、この私的利益と選好を動機にして行動しているのです。それを、いくら「言語を鍛え」て、「人を巻き込み、説得し、賛意を得て」も、それが、他

己を構成する真の規範（＝思想）とはならないのです。それは、単に「赤信号、皆で渡れば怖くない」ことを実現するに過ぎないのです。ということは、この方たちの危惧する専制を実現させる危険が極めて大きいのです。

このことは、民主主義制度そのものの中に、専制を生み出すメカニズムが秘められている、ということを示しています。それは、ヒトラーによるドイツのナチズムの台頭によって証明されました。

この方たちの議論を聞いていますと、まさにギリシャ時代のソフィストを思い出してしまいます。誰も気付いていないようですが、いま確かに、日本は、ギリシャ末期の様相を呈しているのです。

以上、主として公共性について見てきましたが、ここに引用させて頂いた文章の中に、いくつも気になる箇所があります。そのことを、ついでに指摘させて頂きます。

まず、出だしの坂本氏のお話に、『市場経済では、公共性がなおざりにされる危険性があります。殊に八〇年代以降、「市場経済は私的利益の総和にすぎない。そこに公共性などない」といったラディカルな思想がはびこりました。こういう思想が台頭するにつれ、個人を超えた公共性という考え方が浸食されていったのではないのでしょうか』とありました。

私も「市場経済は私的利益の総和にすぎない」と思いますが、でも、こうした思想が台頭したから「個人を超えた公共性という考え方が浸食されていった」わけではないのです。それは、同じ現象の裏と表なのです。

また、『そもそも公共性とは「将来どうするか」と長期的な展望に立った時に初めて現れてくるもので、「現在を楽しめればいい」という時代には乏しくならざるをえません』とありますが、これも、現在、日本では民主主義・資本主義によって皆の自己が肥大し、信仰の喪失によって他己が萎縮した結果、過去も未来（将来）もなくなり、刹那的になって「現在を楽しめればいい」という状態に陥っているのです。

次に、この坂本氏の発言に続く、猪木氏のお話の中に「日本の場合は反省が中途半端になり、自由な活動を阻害してしまうことも起こりました」とありますが、自己肥大・他己萎縮に陥っている日本では、真の反省などできっこないのです。反省する基準が自己しかないからです。ですから、ご理解いただけないかもしれませんが、真の自由も存在しないのです。

ここで検討しました考え方は、両氏に限らず、日本人の多くがもっていることを付け加えておきます。

釈尊のつとば（一一五）

法句經解説

第二章 修行僧

（三六〇）眼（まなこ）について慎むのは善い。耳について慎むのは善い。鼻について慎むのは善い。舌について慎むのは善い。

ここで述べられています眼、耳、鼻、舌は、それぞれ感覚器官ですが、それらの器官が担う感覚そのものは、ご存知の通り、視覚、聴覚、嗅覚（きゆうかく）、味覚です。ここではあげられていませんが、この他に、感覚としては、触覚があります。これを含めて五感と呼んでいます。

この偈では、こうした感覚を慎むのは善いことである、ということなのですが、現代の日本人には、まったく何のことが分からないのではないのでしょうか。

例えば、視覚を慎むとは何のことか、そんなものは慎まなくてもよいではないか、とお考えではないかと思えます。（他の感覚についても同様です。）

逆に、現代では、視覚を楽しむことの方を積極的に追求しているように思えます。それは、テレビに代表され

ます、いわゆる動く映像を見たり聞いたり（聴覚も含まれますが）することであつたり、あるいは、絵画や写真を見ることだったりするわけです。

では、こうしたものをなぜ慎まなければならないのか、多くの方は、おそらく、その理由すらお分かりにならないのではないのでしょうか。

慎むとは、どんなことなのか。私の場合で言いますと、テレビで真剣に見るのは、ニュースや海外事情などの取材番組、教育、経済、文化、などの討論や検討の番組ぐらいです。これら以外は、ほとんど積極的には見ません。そうしたものは、時間つぶしにはいいかも知れませんが、一度しかない人生ですから、そんなひまがあつたら、しなければならぬことが山ほどあるはずですよ。

そんな番組のテレビを見たぐらいで、人間は人格が完成するわけではありません。かえって下劣になるだけです。そうした感覚への執着を断ち切り、ひたすら精進するときだけ、上等な人間に成長できるのです。

いまは、視覚について述べてきましたが、それ以外の聴覚、嗅覚（きゆうかく）、味覚についても同様です。

特に、味覚につきましては、これまでに何度も取り上げたように思います。いま、日本人は、世界中から輸入した食品を、慎むどころか、貪り食べています。

後記

一、今年は、真夏に雨が少なかつたせい、畑の周辺にはえているカヤ(すすき)の穂がなかなか出てきません。

二、そのカヤを毎日のように刈っては、束にしています。その束がある程度たまったら、クロにします。暑いので、一〜二時間を限度としています。

三、ことしは、カボチャをたくさん植えたおかげで、ミカンなどを入れるコンテナに五杯ぐらい採れました。

四、暗いことを書いて申し訳ないのですが、最近の新聞やテレビニュースで、良く報じられる事件に、家族間の殺傷沙汰があります。実父母による、わが子の虐待や保険金をかけての殺害、親や祖父母の子や孫による殺傷事件、「逃げた女房」の実家に押しかけて、その家の人を殺傷する事件、などなどキリがないほどあります。そういえば、私の身近でも起こりました。毎日、畑に行くのにその前を通るお宅で、わが子による放火事件がありました。まだ新築なのですが、ガラスが破られ、雨戸に数カ所大きなキズができ、何か暴力事件があったのかと、思っていた矢先の出来事でした。どうも、息子が来て暴力をふるうので、両親がどこかへ避難していて、そのことに、息子が腹を立てて、灯油をまき、火をつけたようです。すぐ逮捕されました。

五、こうした世相を見ていると、あの昭和48年に最高裁が出した「尊属殺傷重罰規定」は法の下に平等をきめた憲法に違反するとする判決を思い出してしまいません。

六、私は、家族だからこそ、殺傷したものは、尊属、卑属に関わりなく、重罰に処すべきだと思うのですが、現実には逆になっています。こんなことでは、家族・家庭が崩壊するのは、必然です。

七、刑罰を重くすることで、こうした家族間の愛情ある絆を取り戻せるとは、考えませんが、いまや、重罰以外に社会秩序の根幹をなす家族の秩序を取り戻す方法は無いように思えるのです。

月刊 こころのとも 第十三巻 九月号 (通巻 一五三号)	平成十四年九月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>よしと</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと と 口座番号 01610 8 38660	

